

国際文化学部鹿毛敏夫教授の

「狩野元信～瑞峯院の墨絵画家～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2016年11月26日(土)

大友時代を 生きた人々



鹿毛 敏夫

日本の絵画史の中で、狩野派は中世後期から近世にかけて巨大な派閥を形成し、時代の画壇をリードしました。

特にその創始者狩野正信に始まり、元信、松栄と続く室町から戦国期の親・子・孫3代の時期に流派が組織化され、狩野派は日本画壇での中心勢力と化します。そして16世紀後半の永徳の時期に、画壇での支配的地位を確立します。

永徳が織田信長の依頼を受けて安土城内の障壁画を描いたことは広く知られ、その鮮やかな絵は滋賀県近江八幡市の「安土城天主信長の館」に復元されています。狩野派と政権との関係は畿内中央のみの問題で

瑞峯院の墨絵画家



復元された安土城天主と狩野派の障壁画＝滋賀県近江八幡市

狩野 元信

いることが見逃せません。16世紀半ばの天文年間、豊後の大友義鎮（宗麟）は、京都に瑞峯院を創建します。瑞峯院は大徳寺の広大な伽藍の南部に現存する塔頭で、義鎮によるその創建は寺に残る史料から天文21（1552）年のことと

推測できます。注目されるのは、真珠庵に残る「紫野大徳寺明細記」の中の「瑞峯院客殿」の襖絵についての次の記録です。

「礼之間、彩色花鳥、狩野松栄筆」「中之間、墨絵七賢四皓、古法眼筆」

義鎮創建瑞峯院の客殿（現方丈）には、礼之間や中之間などの複数の部屋があり、それぞれにテーマを持つ襖絵が描かれていたのです。

広縁に面した右側の礼之間の襖は花鳥図で彩られ、その作者は松栄。残念ながらその絵は同院に伝わっていませんが、松栄が描いた他の花鳥図はボストン美術館などに複数現存します。

一方、中央部の中之間には墨絵の「七賢四皓」の図が「古法眼」なる人物によって描かれたとあります。作者の「古法眼」とは松栄の父元信のこと。そして「七賢」とは中国の魏末晋初に河南省の竹林に隠れた嵇康、阮籍ら7人（竹林七賢）、「四皓」は同じく秦末の混乱を避けて陝西省南山に隠遁した綺里季ら4人（南山四皓）の隠者を指します。

中国の仙人や隠者を画題とする絵は、16世紀の日本画家たちによって盛んに創作されました。元信の「七賢四皓図」としては、東京国立博物館が蔵する六曲一双のびょうぶ絵があり、瑞峯院客殿中之間の襖絵も同様の絵柄だったと考えられます。

これら瑞峯院客殿画の制作を仮に同院創建の天文21年と想定すると、家督を継いで間もない当時23歳の義鎮が、77歳の元信と34歳の松栄に依頼し、完成させたものと考えられます。

（名古屋学院大学国際文化学部教授、大分市出身）

毎月1回掲載